
中国の拍手に見られるネガティブな感情反応

Negative Emotional Reactions in Chinese Hand Clapping

Abstract

Hand clapping is an act of expressing joy and praise. However, the sound produced by clapping can also be a noise and interfere with smooth communication. For that reason, hand clapping can also rarely express negative emotions such as anger, pain, sadness, and resentment. In China, hand clapping as a negative emotional response exists to date. The hand clapping in this sense in China is a distinct phenomenon from that of other countries including Japan. In the thirteen kinds of kanji notation that mean the act of clapping in Chinese literature, the both palms are rarely hit as a negative emotional reaction. The purpose of this paper is to examine the characteristics and appreciation of hand clapping as negative emotional reaction in China from ancient times to the present day.

1. はじめに

拍手は悦びや称賛を表現する行為であり、強い拍手音にはそれらを確認するものにするはたらきがある。しかし、拍手には、もう一つの側面がある。拍手が作り出す音は騒音であるため、円滑なコミュニケーションにとっては妨げになりうるものである。筆者の一人は、騒音を発しながら親密さを作るというアンチノミーをどう検討するのかが、拍手研究の課題の一つになると述べておいた*1。実際に、拍手のなかにはネガティブな感情反応として拍たれる拍手というものが存在する*2。本稿でとりあげるのは、中国において、悦びや称賛と裏腹に、悲しみ、辛さ、怒りなどのネガティブな感情を表現するために拍たれる拍手である。中国の文献に現われるこれらの拍手の多くは、他の地域には見られず、中国の拍手の特徴と言えるものである。筆者の一人は、本稿に先立ち、中国の古代文献に見られる拍手に伴うネガティブな感情反応について、怒り、悲しみ、罵り、嘆き、無力感の5種に分類したことがある*3。しかし、同論文は、研究対象が古代に限定され、例も少数にとどまっていた。本稿は、中国におけるネガティブな感情反応としての拍手について、古代から現代まで幅広く例を挙げ、どのような特徴があり、表現方法があるのかを検討する。

2. 中国の文献にみられる拍手の表記

中国の文献にみられる手を拍つことの表記には、拍手の他に、拍掌、鼓掌、鼓倒掌、击掌、抵掌、撫掌(抚掌)、撫手(抚手)、拊掌、拊手、搏手、抃掌、抃がある。どれも両掌を拍つ動作を意味しているが、漢字表記によって動作は多少違っている。まず、現代中国で使用される拍手の表記は、上記のうち、拍手、拍掌、鼓掌、鼓倒掌、击掌のみである。「鼓掌」は、連続して拍つ素早い拍ち方で、演奏会や政治集会で拍たれる拍手である。「鼓倒掌」は、スポーツ競技などで「しゅー」と野次を飛ばしながら拍つ拍手である。「击掌」は、大声を発し、足を踏み、胸を打ちながら拍つ拍手であり、鼓倒掌とともに、ネガティブな表現として拍たれる場合がある。次に、抵掌、撫掌、撫手、拊掌、拊手、搏手、抃掌は、古代文献でのみ使用される拍手の表記である。「抵掌」は、掌を押し付けるようなイメージ、あるいは両掌間に空間を作るイメージであり、会話などで拍つ。「撫掌」「撫手」は、触れるようにゆっくり柔らかく拍つイメージであり、楽しんで拍つ。拊掌、拊手は合わせるようなイメージであり、楽しんで拍つ他に、感謝の印として拍つ。手拍子の意味でも用いられる。「搏手」は、叩きつけるようなイメージであり、怒ったり困っているときに拍つ。「抃掌」「抃」は、用例が少ない拍手表記であり、本稿ではそれぞれ1例のみ検討した。

ここで明確にしておかねばならないのは、これらの手を拍つ動作において、手で拍つ対象は掌のみなのかという問題である。中国の手拍ちは、強い感情表現を伴う場合には、掌を拍つのみならず、拳で近くの物を叩いたり、手以外の身体部位を叩く。従って、上記の拍手の表記があるときにも、拳で近くの物を叩いたり、手以外の身体部位を叩くとする解釈も可能であることになる。そこで、本稿では、上記の拍手の表記がある箇所の文脈を検討し、両掌を拍ち、加えて物や身体を拍ったと考えられる例はとりあげたが、両掌を拍たずに、物や身体を拍ったと考えられる例はとりあげていない。

以上を踏まえ、本稿では、拍手によるネガティブな感情反応について、怒り、恨み、残酷さ、無力感、怖れ、嘆き、悲しみ、嘲りの9つに分類した。嘲りの拍手には例が多いので、サブカテゴリーに分類している。以後の用例は、清朝以前の古典からの用例については、代表的な例を網羅していると考えている*4。用例を参照しやすい資料とするため一覧表を作成した。

3. 怒り

まずは怒るという感情である。中国では、現代でも、怒るとともに発する拍手がみられるが、古代から、怒りを表現するために、手を拍つことがある。

南北朝の範曄(398-445)による『後漢書・方術列傳』(432-445)下巻に、「房中调戏，布散海外，张目抵掌，以有为无*5」(女性に悪戯をしたこの事件は皆に知られた。目を大きく張り、「抵掌」して怒ったが、悪戯をした人はそれを意に介さない)とある。「張目抵掌」という言葉で、目を丸くして怒りながら手を拍つ動作を描いている。

漢代の『孔雀東南飛』には、「阿母大拊掌，不图子自归*6」(母親は力を込めて大振りに「拊掌」し、「あなたが戻ってくることは望まない!」と言っ

た)とある。嫁に行った娘が勝手に実家に帰り、母親に会うと、母親が手を拍ち怒ったという意味であるが、幸せになれなかった娘が可哀想という哀れみの拍手でもある。「拊掌」で表現されている。

後晋の劉昫(887-946)による『舊唐書』(945)には、「及德裕失勢，抵掌戟手，同謀斥逐*7」(李德裕は権勢を失った後、周りの人に手を拍たれ怒りに向けられ、排斥されている)とある。周りの人が李德裕に対し、怒りに加え、不満、嫉妬などを込めて拍った拍手であり、「抵掌」で表現されている。

同じく『舊唐書』(945)には、「来俊臣又尝弃故妻而娶太原王庆洗女，侯思止亦奏娶赵郡李自挹女，敕政事堂共商量。昭德抚掌谓诸宰相曰：‘大可笑！往年俊臣贼劫王庆洗女，已大辱国。今日此奴又请索李自挹女，无乃复辱国耶！’*8」(来俊臣は元妻を捨てて、太原王慶洗の娘と結婚した。侯思止も朝廷に嘆願して、趙郡の李自挹の娘を嫁にもらおうとする。昭徳は「撫掌」し、他の宰相に「それはおかしいだろう。この前に俊臣が王慶洗の娘を奪ったのは国を侮辱したことだ。今回、侯思止がまた嘆願をするのは、再び国に恥をかかせるつもりなのか!」)とある。李昭徳が怒り、諸大臣の目の前で手を拍ち、来俊臣と侯思止を辱め痛罵しており、李昭徳の不満が、「撫掌」に込められている。加えて、周りの大臣たちに、自分の考えを知らしめようとした手拍ちでもある。

宋代の歐陽修による『新唐書』(1060)の「奸臣下」には、「徳昭飲酣必泣，胤揣得其情，乃使戩说曰：“自季述废天子，天下之人未尝忘，武夫义臣搏手愤惋。今谋反者特季述，仲先耳，它人劫于威，无与也。”*9」(徳昭は酒に酔うと必ず泣く。胤は彼の心配事を探るために、戩に頼んで聞いてもらうと、徳昭は言った。「劉季述が天子を廃止した後、人民、武将、義臣は、そのことをまだ忘れていない。みんな齒を食いしばり「搏手」して怒っている。今回の謀反は、季述、仲先だけが企てたことだが、彼らの権勢を怖れて、天子を復位させる計画に参加する人がいない!」)とある。李徳昭と宰相の対話の場面であるが、人民に加えて武将や義臣たちが、拍手して怒り、劉季述の施政は国にとって恥辱であると批判している。強い怒りであることを「搏手」で表現している。

北宋の司馬光(1019-1086)による『資治通鑑』(1066-1084)に「望之以問門下生魯国硃云，云者，好节士，劝望之自裁。于是望之仰天叹曰：“吾尝备位将相，年逾六十矣，老入牢狱，苟求生活，不亦鄙乎!”字谓云曰：“游，趣和药来，无久留我死!”竟饮鸩自杀。天子闻之惊，拊手曰：“曩固疑其不就牢狱，果然杀吾贤傅!”*10」(門下生である魯国の硃雲の「賢者は自殺した方がいい」という発言を聞き、望之は「昔、わたしは地位の高い官僚だったのに、まさか六十歳にもなって堀の中に閉じ込められ、卑賤な生活を送ることになったことには耐えられない。毒薬をくれ、自殺する」と硃雲に言い、その後、薬を飲んで自殺した。天子はこの事件を聞いて驚き、「拊手」して、「なぜ堀の中で見張らなかったのか、賢才を失った」と言った)とある。怒りとともに嘆きを表現する拍手である。

元代の脱脱(1314-1356)による『宋史』(1345)には、「贯怒叱之曰：‘贯受命宣抚，非守土也。君必欲留贯，置帅何为?’孝纯拊掌叹曰：‘平生童太师作几许威望，及临事乃蓄缩畏怯，奉头鼠窜，何面目复见天子乎?’*11」(童

貫は、「宣撫を受命したことは領土を守るためではない。もし私を引き留めるつもりなら、帥を置くのは何のためか！」と怒って張考純を叱った。張考純は「拊掌」し溜息をつき言った。「童貫は、通常ならば威光も人望も高いが、危険に直面すると、畏れてしり込みして、ほうほうのていで逃げのびようとした。再び天子に向ける顔はあるのか？」とある。張考純による童貫への怒りの拍手であり、溜息をつきながら論している。

明代の鐘惺(1574-1624)による『夏商演義』には、「应彪闻太公之语，鼓掌大骂：‘货卜村夫，商王无负尔处，尔却背恩忘义，动兵以犯君上。若不下马受缚以见商王，定教尔目下受殃。’ *12」（应彪は太公の話聞いて「鼓掌」し大声で罵り、「馬鹿野郎、商王はあなたを裏切っていないが、あなたは逆に商王を裏切って軍を率いてきた。馬から降ろされて縛られて商王に会うのでなければ、酷い目に遭うぞ！」と言った）とある。身分が上の人への手拍ちを伴う怒りである。

同じく明代末の文献とされる『野史无文』には、「临安人任僕官于滇・惟日称道忠义，以动其下。有所忤，辄鼓掌 大骂，贼怒，多欲杀之。有知者曰：‘此忠臣也！’ *13」（臨安人の任僕である于滇は、人々への教育として、毎日、道の忠義を講じていた。事件が起こり、于滇が「鼓掌」して罵ると、悪人は于滇を殺そうとした。その話を聞いた人は「于滇は忠臣である」と言った）とある。忠臣の于滇は、悪人に対して、拍手で怒りを伝えている。

清代の何恭弟による『苗宮夜合花』には、「王大怪詫，投箸而起，绕桌者三周，忽拍掌呵之曰：‘汝妖徒，眩他人，犹可也。眩及孤，罪当斩。’ 顾左右命牵出斩之，印奴大呼冤，牵王之龙袍，磕头不肯去。 *14」（王大は怪しいと思って、箸を投げ捨てテーブルを3回まわった。そして、いきなり「拍掌」して怒り、「この化物、人を惑わせるな、私が殺してやる！」と言い、部下にあやつを捕まえろと命令して殺そうとした。印奴は、私は何もしていないと言い、跪き低頭し、王の龍袍を放そうとしなかった）とある。王大は、大声で叱りつけるように拍手している。

同じく清代の『春秋配』には、「说奉官遣差打捞尸首的这一群人，在路上磨牙斗齿，七言八语。这个说：“石敬坡多嘴，无端生事，叫人这样劳神。”……石敬坡拍掌道：“列位如何，不是我错了” *15」（説奉官が死体を引き上げさせるために派遣した人たちは、路上で騒がしく話している。「石敬坂は余計なことと言って、人に迷惑をかけて、無駄なことなのに」……石敬坂は「拍掌」して、「何を言われても、私は間違ったことなど何一つしていない」と言い返した）とある。石敬坂は誤解と非難を受け、屈辱に耐えながら交渉を続けた。拍手は怒りに加えて悔しさを表している。

近現代の文献から例を挙げる。馮桂芬による『校邠廬抗議匯校』（1860）には、「时馆林文忠署，语闻文忠，亦为之抚掌，大小京官莫不仰给于外官之别敬、炭敬、冰敬 *16」（時館の林文忠（林則徐）が書いた文書を目にし、林文忠から話を聞くと、皆は「撫掌」した。それは、北京以外の官吏たちが、北京の官吏に、賄賂を渡したからである）とある。清の時代の官僚たちは貧しく、給料だけでは生活が続かない。北京の外にいる官僚たちは、都にいる比較的貧しい官僚たちに金品を贈り、タイムリーな情報を手に入れ栄転を企てることがあった。不透明な収入や賄賂によって人並みの生活を維持すること

は、官界において黙認されていた。ここで「撫掌」は、好ましくないこと望んでいないことを容認してしまうときの怒りと悔しさを表現する拍手である。拍手の意味は、時代背景から読み解かなければならない。

魏秀仁(1818-1873)による『花月痕』には、「荷生笑道：“你拉我到那里，倘他又做了闭门的泄柳，你这冤从何处去诉呢？”剑秋拍掌道：“今日再不能进去，我连‘欧’字也不姓了” *17) (荷生は笑いながら「私をそこに連れて行って、もしあの人にまた断られたら、あなたの苦情を誰に伝えればいいのか」と言った。劍秋はそれを聞き、「もし今日もまたそこに行かないなら、苗字を変えてもいいよ！」と「拍掌」して答えた)とある。以前に門前払いを食わされた劍秋は、荷生の冗談を聞き、拍手で、再び門前払いを食わされまいとする決意とともに、怒りの感情を表しているのである。

麦仲華による『皇朝経世分新編・税則利権一』(1898)には、「初意不无病民之事，于是论时务者，莫不扼腕抵掌，欲去厘金，而洋人亦遂执洋货免厘之税，以继其后*18) (初めの話題が病気の民の話題ではなかったので、時事問題を論じている人たちは、手首を回したあと、「抵掌」し怒った。中国人が厘金税を逃れようとする、西洋人も厘金税を免れるために外国製品を持って、後に続こうとする)とある。19世紀末期は中国が列強に蹂躪されていた時期である。手首を回して手を拍つことにより、西洋人への強い怒りを表現している。手首を回す動作は、中国人が喧嘩の前などによく行う動作である。怒りの拍手音に身体動作が伴い、徹底してネガティブな反応が表明されている。

新聞の記事にも、拍手で怒りを表している例が見られる。1902年の『新民叢報』には、「以上于本论论旨无甚关系，不过以其语语外行，令人喷饭，故附驳之，亦使听演说而大拍掌者念及此掌之无辜而受痛耳*19) (その演説は、本題とは無関係であり、はずれた内容であったため、演説を聞く者は、吐き気をもよおし、論駁し、大きく「拍掌」をした。「拍掌」の音は人を苛立たせるものであった)とある。怒りの拍手が、拍手対象者のみならず、演説を聞く他の人々にも不快感を与えている。

1919年の『小説新報』には、「那一肚皮的瘟气按捺不住便跳脚拍手的骂道：“老子祇望你给个大钱，你舍不得也好回绝我的，为什么引诱老子从大早起直走到现在倒一个钱不给？” *20) (ひどい癩癩をコントロールできず、地団駄を踏んで拍手して罵った。「金をもらいたかっただけだ。払いたくないならきちんと断ってくれた方がいい。なんで朝から今まで働かせて、少しも払ってくれないんだ?」)とある。話し手は雇い主からお金をもらおうとしたが、雇い主はそれを断らずに朝から晩までずっと歩くように仕向け、結局、何も与えなかった。そのため話し手は怒り、拍手して罵った。

1920年の7『北京大学学生週刊』には、「后第一第二两队都到法科门外集合。至则鼓掌大呼中华民国万岁！并要求军警一同拘囚。被拘的同学闻声相应，一时掌声万岁声，彻天震地*21) (第一列と第二列の学生たちは、法科門の外に集合すると、抗議のために「鼓掌」しながら「中华民国万岁」と叫び、先に逮捕された学生と一緒に我々も逮捕してほしいと求めた。するとすでに逮捕された学生たちも「鼓掌」し万歳と叫んだ。万歳はどこでも聞ける)とある。多くの学生により拍たれている怒りの拍手である。五四運動

は、中華民国時代に北京から全国に広がった学生による抗日運動である。怒りの拍手は近代史を彩るものでもある。

1921年12月16日の『申報』には、「劳动人骂声更是大了再加以拍手顿足*22」（労働者の罵声はいっそう大きくなった。そして拍手しながら地団駄踏んでいた）とある。

1922年の『快活』には、「更加生气于是立起身来顿足拍手的骂道*23」（更に怒ったため、立って地団駄を踏んで拍手して罵った）とある。以上の2例は、足を踏み鳴らし、拍手して怒りを表現する用例である。

1922年3月1日の『少年中国』には、「巴黎华侨大会某女士痛哭陈词，何鲁拍掌大骂，从此怀弹的华工奔走于全权代表之门*24」（パリ華僑大会において、中国劳工の人権のために、ある女性が号泣し、苦境を訴えた。そして、「拍掌」して激しく罵った。その後、皆は権力者のところに行った）とある。拍手は、怒りに加えて、苦境を知ってもらおうとして拍たれている。

1955年5月31日の『人民日報』には、「我看到这里，不禁咬牙跺脚，击掌捶胸地喊出来：好一个‘远大的未来！’这个家伙的用意是十分阴险呀！你不老老实实在地向人民低头，还想更进一步地向我们革命事业进行猖狂的进攻*25」（ここまで見てきて、思わず歯を食いしばり、足を踏み鳴らし「击掌」し、胸を打ち、こう叫んだ。「遠大な未来なんて、よく言うな。こいつはずるい。国民の意見に従うことはともかく、さらに革命事業を攻撃しようとしている」）とある。文化大革命の前夜における共産党内の修正運動の記事であり、拍手以外の身体動作についても記されている。「击掌」は、足を踏み鳴らし、胸を叩く動作を伴う拍手であるが、この一連の動作は、中国人に特徴的な動作であり、現在でも見ることができる。話者の声と激昂が、身体動作を伴うことにより強調されている。

スポーツ競技の記事に見られる拍手には、応援や称賛のみならず、怒りの反応を含む例がある。1961年の『新體育』には、「观众鼓倒掌，发嘘声，自然是事出有因。它不外乎看到裁判员误判、评判不公、或者是观众对裁判员的评判产生不一致的看法，借鼓掌来提醒记录台纠正时间或比分的差错*26」（観衆たちが「鼓倒掌」し「しゅー」と声を発したのは、審判員が判断を誤ったからである。観衆たちは、そんな結果に不満を持ち、拍手で注意し、ミス直させたりするのである）とある。鼓倒掌とは、野次を飛ばしながら怒って拍つ拍手である。観客は、拍手することにより、記録係に、時間やスコアの誤りに注意してほしい気持ちを伝えている。野次を飛ばして拍つこの拍手は、修正を示威する行為であり、懲戒的役割を持つ拍手とすることができる。

政治的事件を記した記事においても、怒りの拍手の例がある。1987年7月6日の『人民日報』には、「青年学生采取不同形式抵制奴化教育。敌伪派的汉奸文人来鼓吹中日“共荣”，学生不等第一个人讲完，就跺脚、击掌，气得汉奸文人毫无办法。1943年12月，汪伪发动“禁止烟、赌、舞”运动，进行欺骗。南京和上海的党组织决定利用这个运动来教育群众，发动学生、青年参加，举行集会游行，冲击烟馆、赌场和舞厅，并当众焚烧查抄的烟土*27」（青年学生は、さまざまなかたちの日本による理不尽な教育をボイコットする。親日の学者が中日の共栄というホラを吹くと、演説の途中でも学生たちは足を踏み、「击掌」したりして不満の意を表明した。1943年12月、汪精衛は

「禁煙、賭博禁止、舞禁止」の運動を行い、人々を欺こうとしたが、南京と上海の党組織は、この運動を利用して、民衆を教育することに決めた。学生や青年たちに参加を呼びかけ、デモを行い、タバコ館や賭博場、ダンスホールを襲撃し、差し押さえた阿片を焼いたとある。この記事は、日本が中国人に強制しようとした理不尽な教育に対する学生の戦いの場面を描いている。学生は怒り、足を踏み手を拍つなどの行為を通じて、汪精衛による禁令を阻止する。怒りや憤慨が吐露される場面であるが、足踏みと拍手は、そうした感情反応を放出するのみならず、参加者がそれを共有し結束を強める役割も果たしている。

ここまで怒りの拍手を検討した。拍手で怒りを表現する場面は、古代から現代までのさまざまな文章に記録されているが、怒りの拍手は強い感情反応であると言えることができる。激しい怒りの感情を解消するには、直ちにそれを何らかの手段により放出しきらねばならないが、中国では、そこに拍手の音を伴わせる。拍手が感情の放出に適すると認識されるのは、すぐにそれを実行に移すことができるからであろう。単に拍手するのみでも、怒りを放出する手段になりうるが、歯を食いしばる、こぶしで胸を打つ、地団駄を踏む、口汚く罵るなどの一連の動作が拍手に加わることにより、思う存分外界に表現しきることができる。なお、怒りの拍手のこの効果は、感情の放出のみならず、話者の説得力を強めたり、結束を固める効果をもたらすため、他者の注意と承認をとりつけようとする拍手であると言えることもできる。

4. 恨み

怒りの感情の沈潜が、恨みである。例は少ないが、恨みの表現として拍たれる拍手がある。北宋に成立した『太平広記』(978)には、「須臾，見此人从水而出，对绡拱手曰：“罪不当死，官枉见杀，今来相报。”即跳入绡口，因得病，少日而殁*28」(すぐさま、殺された人は水の中から姿を現し、張絢に向かって「撫手」し、「私は、罪があるが、殺されるべきではなかった。役人が人を間違って殺すので、今日は恨みを晴らしに来た」と言った。そして、張絢の口の中に入ると、張絢は病死した)とある。殺された人の霊が張絢に拍手して恨みの言葉を述べる。恨みと怒りとを併せ持つ拍手であり、強烈なネガティブ感情を表出している。

清末の例をあげよう。1921年8月14日の『申報』には、「日久就得隔食病死了。煜峰死了一位贤慧的夫人，并不伤心，幽兰更是暗地里拍手呵呵的笑*29」(日が経つにつれ、食をあけ、病死するに至った。煜峰は賢い妻を亡くしたが、悲しみの気持ちがなく、幽蘭は密かに拍手してホホホと笑う)とある。幽蘭は煜峰と煜峰の妻を恨んでいる。この拍手は恨みとともに、恨みを晴らした悦びの拍手でもある。

同様に、恨み晴らした拍手の例として、清末の『快活』(1922)には、「立逮玉郎至榜掠无算，置于狱数月玉郎竟瘦毙，丽珍拊掌称快，曰：小试吾辣手，三年宿怨倍其值以取偿矣*30」(玉郎はすぐに逮捕され、塙の中に閉じこめられ、数ヶ月も経ずに餓死した。麗珍は「拊掌」し、「計略を試み、三年間の恨みをやっと晴らした」と言った)とある。玉郎が刑務所に入り数ヶ月後に亡くなり、麗珍が拍手した場面の描写である。麗珍の拍手は、玉郎に対する恨

みの拍手であるが、恨みを晴らした喜びも表現している。

5. 残酷さ

拍手する動作が、人間の冷たさや暗さ、残酷さを表現することがある。北宋の司馬光による『資治通鑑・梁記』（1066-1084）に、「王遣宦者陳旻往諭之，納對旻剝載腹，抽腸以系馬足，使繞而走，腸盡氣絕。又齧割，出其心，向之拊舞，焚其餘骨*31」（蕭繹は陸納を説得するように陳旻を派遣すると、陸納は陳旻の目の前で張載の腹を切り裂き、腸を引き出して馬の足に巻きつけ、腸がすべて引き出されるまで馬を歩かせた。そして張載が死ぬと、肉を切り取らせ、心臓を取らせた。陸納は張載の死体に対して「拊」して踊り、残った骨を燃やした）とある。陸納は張載を殺しても満足しない。陳旻に向かって手を拍つとともに、躍り上がって喜びを見せるのである。この拍手は残酷さと満足感をともに表現している。陸納が皇帝の使者である陳旻を眼中に置いていないこともわかる。この例のような残酷さには、南北朝時代の政治の混乱が背景にある。

明代の小説である『後西遊記』（作者不明）には、「不消数日，不怕不饿死在夹壁峰内。你道此计好么？」残惡听了，鼓掌大喜道：“妙计，妙计！*32」（残惡は、彼らを断崖絶壁の山奥で餓死させるという妖怪の提案を聞き、「鼓掌」して喜び、「いいアイデアだ」と言った）とある。妖怪の妙案を称賛して拍たれた拍手と解釈できるが、それだけではない。弱者に向けられる強者の冷酷な行為であることが、この拍手の残酷さを際立たせている。

近現代の例を挙げよう。1939年山西における国共両軍の武力衝突において、閻錫山が寝返り、晋西事変を引き起したときの拍手の記述を見てみよう。『晋绥边区资料拾零』（1977）には、「是年冬即发动晋西事变，与敌寇配合夹攻新军决死队，屠杀牺盟会员，毒锋所及血满吕梁，敌寇为了拊掌称快，此其勾结敌人破坏抗战罪不容诛者六*33」（この年の冬に、晋西事変を起こし、敵軍と結託して、新軍決死隊を挟み撃ちし、同盟会員を殺戮した。敵軍の行軍により、同盟会員は血の海となり、敵軍は「拊掌」して快哉を叫んでいる。敵と結託して抗戦を破壊する罪は、とてつもなく大きい）とある。この拍手は、勝利を祝する拍手ではない。虐殺された軍人に対して拍手する敵軍の残酷さが描かれている。

鞠盛による『中山頌：孫中山詩傳』（1996）には、「洋兵闻惨呼，狞笑相捧腹。争前竞围观，拊掌皆大乐。船民力攀梯，屡被刀刺落*34」（船を乗っ取った外国兵は、悲鳴を聞くと、凶悪な笑いを浮べ腹を抱え笑った。そして先を競って見物し、「拊掌」し楽しんだ。乗船客は梯子によじ登るが、刃物で突き落とされた）とある。この文は短い詩歌であるが、乗船客が次々と死んで行く光景を楽しんでいる外国兵の残酷さが、「拊掌」により、余すところなく表現されている。

これらの拍手は、感情の鬱屈や沈潜としてよりも、感情が込められていないように拍たれており、残酷な行為の描写をひき立たせている。喜びや満足感と裏腹な表現として現われることから、ネガティブな感情反応として拍手する習慣がない文化圏の人々は、これらを称賛の拍手ととり違えるのではないだろうか。

6. 無力感

中国では、手を拍って、諦観やどうすることもできない無力感を表現することがある。ゆっくりと手が拍たれることが多い。南北朝時代の『後漢書』（432-445）には、「田疇不得墾辟，禾稼不得收入，搏手困穷，无望来秋*35」22（農民は田畑を耕すことができない。作物が収穫されない。「搏手」するほど生活が困窮し、来年の秋まで耐えられない）とある。もうどうしようもない、お手上げという感情とともに発せられた拍手である。叩きつけるような拍手であることを、「搏手」で表現している。

躊躇や決断しにくい消極的な心境を伝える拍手もある。清末の方遒による『百年英烈傳』には、「嗣同道：“先生说的可是袁慰亭（世凱）？”“正是！”康有为抚掌道：“复生兄以为此人何如？”“以前听翁常熟（同龢）相国的议论，说袁慰亭虽然言谈爽朗，但欠诚恳，未知是否属实？*36」（二人は袁世凱が大任を担える人物かどうか、袁氏の人柄を語っている。康有為は「撫掌」しながら譚嗣同に「復生さんをどう思うか？」と聞くと、譚嗣同は「以前、翁同龢の議論を聞きましたが、袁慰亭は弁舌爽やかですが、誠実さがなく、よく分かりません。」と答えた）とある。康有為と譚嗣同との対話であり、拍手は、康有為の躊躇や決断しづらい心境を表している。

近現代には、無力感を表現する拍手が多く見られる。『歇浦潮』（1912）には、「众人听到此处，那两只手心痒得再也忍不住了，便不约而同的一齐鼓起掌来。友信心中虽觉难受，面子上却不能不陪他们拍手。晰子颇为自得，又道：“我因小女与志敏虽有婚约，尚未成亲，故曾劝她不必固执，不料她反寻死觅活起来*37」（皆はそれを聞くと、我慢できずに、期せずして一齐に「鼓掌」した。友信は居心地悪く感じ、彼らの拍手に付き合いたくなかったが、皆と一緒に「拍手」した。それは、晰子が「娘は志敏と婚約したが、まだ結婚していない。だから娘に意地を張らないようにと諭したが、結婚できないのなら死にたいと言ったよ」と述べたときである）とある。娘の婚約者の葬儀のときに、参列者は、娘の決意の固さを称賛し拍手したが、婚約者の叔父の友信は、娘が死んでしまいたいと言ったことに対して、可哀想でやりきれない気持ちで手を拍ったのである。

『禮拜六』（1922）には、「七小姐摇着头儿哭道：“不是的，我不忍心他”。刘太太拍手道：“这简直糟透了，弄得我都没了主意。”七小姐呜呜哭道：“娘呵，你叫表哥来替我梳头”*38」（お嬢さんは首を振りながら「違う、彼のことをあきらめたくない」と泣いて言った。劉家の奥さんは「最悪の状況だ。どうすればいいの」と拍手して言った。お嬢さんは泣きながら「お母さん、いとこのお兄さんをお呼びきて、髪を整えてほしい」と頼んだ）とある。お嬢さんが、結婚の当日に実家を離れるのが名残り惜しく、泣いたシーンの描写である。劉氏の奥さんは、拍手して、可哀想だがどうにも仕方がないという気持ちを伝えている。

1924年8月22日の『申報』には、「友人王君服务无锡某纱厂，为人急公好义，谦和明理，惟喜吸纸烟，每日非两小包不能过瘾也。某日偶与闲谈，谈及闽、粤、奉、赣、直隶、湖南等省水灾弥漫待赈，王君击掌叹息，深以无力助赈为憾，并谓数千万同胞不幸罹此大水，可怜灾黎人亡家破国，人苟有恻隐心

腸者，理宜慷慨解囊以資救援，恨我無錢，力不從心奈何！*39」（友人の王君は無錫の某紡績工場に務めており、人となりはきわめて公正で、礼儀正しい。煙草が好きで、毎日二箱吸う。ある日、私は彼と雑談し、閩（福建省）、粵（広東省）、奉、贛（江西省）、直隶（河北省）、湖南が水難に襲われ、甚大な被害を被り、被災者は救援を待っているということに話が及んだ。王君は「击掌」し溜息をつき、津波に遭った被災者の助けにも行けず、被災者が可哀想であるが、お金がないため、無力な自分を悔やんでいると言った）とある。拍手と溜息とにより、無力感に加え、哀れみや悲しみなどのネガティブな感情が表現されている。

中国では、思いあぐねたり焦っているときに、「撫手」「拊掌」などの拍手をし、ゆっくりと歩き、頬を搔くなどの動作を行うことがある。例えば、詩集『仙人掌』（1980）には、「只見他拊掌摩腮，/情急更徘徊！*40」（ふと見ると、彼は「拊掌」し、頬を搔く、焦って気持ちが空回りしている！）とある。この詩は、機会に恵まれない主人公の諦観と焦りの気持ちを拍手で表現している。

1980年11月13日『三亞晨報』に掲載された「愚人節拾趣」には、「孰是孰非，这只有求救于孙悟空的火眼金睛，否则，也只好拊掌大呼‘上当’，不幸被选为愚人节的供品*41」（これが正しいかどうかは、孫悟空の嘘を見抜く眼力に頼るしかない。そうでなければ、「拊掌」し「騙された」と叫び、エイプリルフールの犠牲者になったと嘆くしかない）とある。拍手を通じて、騙された悔しさとともに、嘘を見破ることができない無力感を伝えている。

無力感の拍手とともに思いを馳せる用例もある。2009年7月10日『人民日報』に掲載された「相聲這幅畫的留白處」には、「如果说相聲是一幅巨幅工筆重彩，那酣笑中间的泪滴、那抚掌之余的叩问、那苦难背后的挣扎、那岁月深处的故乡，是淋漓墨迹之外的大片留白。相聲百年，是笑声的百年，也是思想的百年*42」（漫才は丹念に描かれた絵画のようなものであり、人を笑わせるものであるが、涙を誘うものでもある。人は「撫掌」を通じて自問する。漫才の背後に多くの苦しみやあがきがあるのは、絵具の外側に広がる空白が、故郷の長い歳月を表わすのと同じではないかと。漫才の百年は、笑いの百年であり、思想の百年でもある）とある。漫才に関する文章であるが、「撫掌」は、漫才に対する即座の反応として拍たれるよりも、漫才の背景に想いを馳せることを消極的に表現するために拍たれている。

7. 怖れ

中国の拍手には、拍手者のおかれた状況や拍手対象者に対して怖れの気持ちを表わす例がある。『全宋詞』（960-1279）における辛棄疾（1140-1207）による「菩薩蠻・金陵賞心亭為葉丞相賦」には、「人言头上发，总向愁中白。拍手笑沙鸥，一身都是愁！*43」（人々は髪が白くなった。物事を考えすぎ、執着しすぎた。全身が白羽の海鳥のように、憂いまみれではないかと、拍手して笑う）とある。老人は年をとることに怯えている。この拍手は、自嘲であるよりも、大志を実現しないまま老いることへの怖れの表現である。

近現代の例を挙げる。清代の李雨堂（生没年不詳）による『狄青五虎将全傳』「感義狭同伴離姦 圓奇夢賢王慰母」には、「狄青在着御書樓内，十分惱

恨，但遵着韩爷之言，只得忍耐。韩爷见庞洪去了，拍手冷笑道：“庞奸贼啊，纵使搜不出狄青，也不消用许多守候之人，劳兵费饷，直比愚夫呆子，乃是自作自弄*44」（御書楼内で、狄青はとても怒っているが、韓爺との約束を守り、我慢するしかなかった。韓爺は洪を見て、拍手し冷笑した。「洪は悪人だなあ、狄青を探し出せなくても、こんなに多くの人に見張らせなくていいのに。人や金の無駄遣いだ。馬鹿みたいに、自業自得だ）」とある。韓爺は、多くの人に見張らせている洪に対して怖れの気持ちが生じ、拍手でそれを表現している。他方、韓爺は、洪が馬鹿みたいだとも言っているので、拍手は嘲笑の表現でもある。この拍手は、両者が混在した心境を表現している。

清朝末期、西洋の軍隊が戦艦と銃を整備し、中国を侵略した場面で拍たれた拍手では、怖れの気持は顕著である。麥孟華（1875-1915）による『麥孟華集』には、「前者死，后者继。死至七人，而欧人观者咸不忍视，拍手流涕，瞪目结舌，请止其杀*45」（人が次から次へと死んでいく。7人も死ぬと、西洋人もその光景に耐えきれず、拍手し涙を流し、怖れおののき、「虐殺をやめてくれ」と言った）とある。描かれているのは、戦争後に生じた悲劇的な状況であり、西洋人もそれを直視できず、拍手しながら涙を流し、殺害を止めるよう要求したのである。この拍手は、虐殺に対する怖れとともに、嫌悪や傷心を表現している。ただし、近現代の西洋人は、ネガティブな感情反応として手を拍つ習慣を持たないため、この文の著者が、銃殺を制止しようとする彼らの何らかの動作を、拍手ととりちがえているものと考えられる。

民国時代1913年7月9日の『申報』には、「该少女竟夺其镜头。摔之于地。锵然有声。玻璃四溅。游人见者。鼓掌和之。莽男子骤遭损失*46」（少女は写真を撮ったが、カメラを地面に落とし、鋭い音がしてレンズの破片が飛び散った。それを見ていた人は「鼓掌」したが、無鉄砲な男が損害を受けた）とある。この拍手は、割れたレンズが四散することに向けられており、ガラスの破片が身体を傷つけることへの心配や怖れを拍手で表現している。

1920年1月17日の『申報』には、「楼上倚窗而观者皆拍掌，街左右之人亦拍掌，楼上复有大呼打者，学生皆举手呼不可打而打打之声不可止*47」（街中にいる人が「拍掌」する。そして、部屋の階上にも「拍掌」する人がいる。学生は皆、手を上げ「やめてくれ!」と言ったが、まだ続けている）とある。民国時代には、外国人の侵略者が、しばしば市中の中国人を襲うことが多かった。この記事は、学生が侵略者に暴力を振られることを心配した路上の人々が、学生たちに拍手を送る光景を描いている。拍手は暴力に対する怖れとして拍たれている。怖れの気持ちが、拍手の音とともに、周囲に伝播していくのである。

8. 嘆き

理想とする状況、利益や欲望などを外界に求めて満たされないとき、それを嘆きとして表現することがある。嘆きの拍手は晋代からある。晋の陳壽による

『三国志・魏志・鐘會傳』（280-290）には、「王独拊手叹息曰：此真王佐材也！*48」（王独は「拊手」し嘆き、「本当の人材を惜しむべき」と言った）とある。

王独は拍手して、虞松の離反を惜しみ嘆いている。また、宋代の宋祁・歐陽修

による『新唐書』(1060)には、「闻人善，抵掌嗟叹*49」(他人の善行を聞いて、「抵掌」しながら嘆いた)とある。これらの例は、典型的な嘆きの拍手である。

不満の意味をこめた嘆きの拍手もある。宋代の司馬光による『資治通鑑』(1066-1084)には、「帝抚手叹曰：如何会无车与*50」(皇帝は「撫手」しながら嘆き、なぜ、車に乗れないのかと言った)とある。皇帝は自らの状況への不満と嘆きを拍手で表現している。

宋代には「宋词」が流行った。その中に嘆きの拍手の用例がある。『全宋词』(960-1279)における叶夢得(1077-1148)による「水調歌頭・送八舅朝請」には、「十载悲欢如梦，抚掌惊呼相语，往事尽飞烟*51」(十年が夢のように悲しい。彼は「撫掌」しながら驚きの声をあげ、前の出来事が煙のように消えていった)とある。ここでの「撫掌」は、驚きを意味するのであるが、文脈から見れば、人生があっという間に過ぎてしまうことへの嘆きを表現している。拍手によって、過去の記憶が意識にのぼり、苦悶と失意に襲われるのである。

同じく『全宋詩』における黄昇の「重叠金」には、「此身元是客，小住娱今夕。拍手凭阑干，霜风吹鬓寒*52」(客の私は、今宵、ここに泊まり遊ぶ。拍手し柵に寄りかかると、もみあげが風に吹かれ、寒く感じる)とある。この詩が表現する感情は素朴で微妙である。詩人は自分を抜け出したいと思うが、束の間の安らぎに中にも寒々とした現実を突きつけられる。

南宋の詩人陸游(1125-1210)による『雨中登安福寺』には、「北顾极幽并，东望跨海岱。喟然抚手叹，从古几成败？*53」(陸游は、遥か北方を見渡し、東海を見て、しかたない思いで嘆息し「撫手」した。王朝の交代や英雄の敗退は、避けられないのか?)とある。陸游が嘆きの拍手を拍つ場面である。この嘆きはあきらめの気持ちの表現であるが、手を拍つことには音を遠方まで到達させようとする意図も認められる。従って、単なる無力感や諦観で拍たれたのではなく、それを嘆きとして訴えようとする意図で拍たれた拍手と解釈することができる。

『全宋词』(960-1279)における王炎(1137-1218)の「呂待製所居八詠・醉松」には、「抚手摩挲三叹息，世间那有独醒人*54」(「撫手」し三度歎息する、独り醒めているのは私だけである)とある。時流に流されない人物がいないことを拍手により批判し嘆息する。他者に聞かせるのではなく、感慨に耽る独りの拍手であり、詩人の孤高が伝わってくる。嘆きの拍手であるが、強い感情は伴わない。

明代に成立した許仲琳(1560-1630)による『封神演義』には、「众门人礼拜毕，老子拍掌曰：“周家不过八百年基业，贫道也到红尘中来三番四转；可见运数难逃，何怕神仙佛祖。”元始曰：“尘世劫运，便是物外神仙都不能免，况我等门人” *55」(門下生の礼拝を受けた後、老子(太上老君)は「拍掌」し、「周家の歴史はただが八百年に過ぎない。私も人界には何度も行ったが、運命をどうにも逃れ得ないことを知ってから、仙人仏を怖がる必要がなくなった」と言った。元始天尊は「人界では、仙人にも劫運がありそこから抜け出すことができない、況んやわれわれ門人はなおさらだ」と言った)とある。世事から手を引かない太上老君を、他の神々が諭す場面であるが、太上老君は手を拍ちながら世の変転を嘆いている。

近現代の例を挙げる。1902年2月23日の『新民叢報』第二巻には、「老人

狼狽望影奔少年，抵掌唉欣欣天荒破得旧天地鲜血染出新乾坤*56」（老人は狼狽し、走っている少年の背中を見て「抵掌」し、「この若い少年も、老人が死んでいくのと同じように、殺されてしまう。」と嘆いた）とある。現実世界に対する老人の絶望を伝える拍手である。拍手は嘆きに加えて無力感の意味も持っている。

『中華民国史事紀要』（1926）には、「全厂上下内外数十人，除洋工程师外，一切俸给食用开支，未滿万金耳。刘督饶首拊掌，嗟叹久之*57」（工場内外の数十人は、外国人技師を除き、俸給がすべて食費のために与えられ、一万金にも満たない。劉都督は「拊掌」し、喟然としてこれを嘆いた）とある。民国時代の工場の経営が困難であることを記録した文章である。劉都督は現状から抜け出ようとしたが、成功せず、溜息をついて手を拍つしかなかった。拍手の意味は複雑であり、嘆きに加えて悔しさも表現されている。

1930年9月26日の『申報』には、「如洋洋数百余言，针针见血句句沉痛，声泪俱下，悲壮淋漓，这一场管叫你鼓掌雷鸣，感叹不绝*58」（講演者の発する多くの言葉が、胸に突き刺さるように痛々しく、観衆は涙を流し、悲壮に沈んだかに見えたが、「鼓掌雷鸣（雷鳴の拍手）」を送り、感嘆してやまなかった）とある。講演の場面を記録した文章である。講演を聞いた聴衆は、涙を流しながらも力強い拍手を送り褒め称えた。悲壮に感応する嘆きの拍手であるが、称賛の拍手であるとも言える。

1966年に出版された「大甸風雲」には、「‘都是我，都该我一个人负责。嘿，真该死！我怎么粗暴到了这种程度，这些情况我一点也没想到。老毕，你说咋办？我给党造下了损失呀！’他突然坐在凳上，抓住自己的头发，拍掌顿足地咳声叹气*59」（「すべて私です。一人で責任を持つべきです。本当にひどい！ここまで乱暴とは思いませんでした。どうするんですか？ 私が党の利益を損じたことを！」）と言うと、彼は突然椅子に座り、自分の髪を掴み、「拍掌」して地団太踏み咳声で溜息をついた）とある。拍手し床を蹴りながら嘆くことにより、自らの乱暴な行為や不謹慎な考えによる党の損失に責任を痛感し、自分を責めている。拍手とともに髪を掴み両足を踏み鳴らすのは、嘆きの感情を周囲に強く訴えるためである。「拍掌顿足地咳声叹气」という書き方は、日常生活における感情の昂りを表現するために、しばしば使われる書き方であり、悦びを表現するのに小躍りするのと対照的な動作である。

王成聖等による『中外珍聞』（1974）には、「而袁先生在和我拊掌大笑之后，他不胜慨叹的说道：“可惜了我那一领口外的萝卜丝皮袍，就为了你空中楼阁的剪衣队，害我白白的送给了人家*60」（袁さんは私と「拊掌」し笑った後、「残念です。私の革ガウンは、あなたの空想の服を作る人達に、ただであげてしまった。もったいない！」と嘆いた）とある。服を他の人に与えてしまったことに対する後悔と嘆きの拍手である。

1989年5月23日『人民日報』「孤鴻盤桓」には、「他为电影《日出》写出了这样的主题歌：‘人生好似一场梦，你我相逢在梦中。待到梦残心碎时，人面桃花去无踪’。活化出陈白露的心灵。曹禺听后，不禁抚掌而叹，连说想不到南国千里，会有这么个异代知音*61」（彼は映画『日の出』に、次の主題歌を書きあげた。「人生は夢の如し、あなたと夢で出会う。目覚めて、心折れるとき、あなたの顔も桃の花も消える」と陳白露（主人公）の心境を語った。

曹禺はそれを聞いて、「南国になら、そのような人がいるでしょうに！」と「撫掌」し溜息したとある。曹禺は主題歌を聴いて拍手しているが、北国でそのような人を見つけられなかったことを嘆きながら、静かなる感慨として手を拍っている。嘆きと感慨のどちらとして拍たれているかを特定することはできない。

『光明日報陳繼儒輯存』(1997)「読書十六観」には、「子美当读到《汉书》张良传至张良与客狙击秦始皇处时，抚掌感叹道：‘惜乎击之不中！’不觉满饮一大杯*62」(子美は、『漢書』を読み、張良による始皇帝暗殺の場面で「撫掌」し、「惜しい、はずれた、失敗した!」と嘆いた。そして、思わず酒を一杯飲んだ)とある。子美は、拍手で張良の失敗を嘆いている。

2001年1月20日の『人民日報』に掲載された求卓越による「商海搏击」には、「许宝鸿掷地有声地说：‘我认罚，怎么罚都行!’北方大汉击掌感叹*63」(許宝鴻は「認めるよ、どんな罰でも文句言わない」と声を張上げ、「击掌」し嘆いた)とある。過酷な仕打ちへの嘆きであるとともに、自らの存在と行動を否定する嘆きの拍手である。

以上のように、嘆きの拍手には、自省や複雑な感情反応を含意する例が多く見られる。

9. 悲しみ

悲しみの気持ちとともに拍たれる拍手の例を挙げる。『漢魏六朝三百名家集・魏阮元瑜集』(165-212)に、「乃诸子长逝,元瑜最先,遗文鬼名,抚手痛悵*64」(友人が亡くなると、元瑜はすぐさま文を書いた。彼には文才があった。そして「撫手」して哀悼の意を示した)とある。拍手を通じて、悲しみの気持ちを表現している。

東晋の干寶(282-351)による『搜神記』の中に、「夜闻楼上哭云：小儿出行不还。公拊掌曰：此子言真衰也*65」(その夜に楼の上で泣く声が聞こえた。妖精は「子供が出ていったきり戻ってこないよ」と言った。曹操は「拊掌」して「この妖精は、ひどく弱っているな」と言った)とある。曹操は妖精の衰弱を不憫に思い手を拍っている。

悲しみの気持ちを表現する手拍ちは、詩の中に見出される。『全宋词』(960-1279)における王千秋の「西江月」には、「此情拍手问阑干。为甚多愁我惯*66」(この恋に拍手して欄干に問う。なぜいつも憂愁になるのか?)とある。欄干に問いかけながらの拍手であるが、悲しみの気持ちが含まれている。

同じく宋代の陸游(1125-1210)の『送韩梓秀才十八韵』には、「但念侯君房，不知尚痴不？君闻拊手笑，怪我狂未瘳*67」(君の部屋を想う。痴人になってしまうのだろうか。君は私の話を聞き「拊手」して笑い、愛情のために気が狂ったのかと言う)とある。友人は笑っているが、別れを惜しみ、手を拍っている。拍手は、名残り惜しくも、別れが避けられない切なさを表現している。

元代の脱脱による『宋史』(1346)には、「刘洪道与飞有旧，离劾其足恭媚飞。闻飞罢宜抚，抵掌流涕。于是洪道抵罪，终身不复*68」(劉洪道は岳飛の旧友である。万俟卨が劉洪道と岳飛に罪を着せ、岳飛が宣撫使から罷免され

たことを聞くと、劉洪道は、「抵掌」して涙を流した。劉洪道も罪を着せられ、一生官吏になるのを禁止されたのである）とある。親友が中傷され官職も失ったことを知った劉洪は、手を拍ち涙を流す。悲しさとともに、友人に同情する拍手でもある。

近現代に眼を転じる。1905年12月8日に『民報』に掲載された「周浩然傳」には、国家、革命、人民のために自らの命を捨てた革命烈士の意思が、人々の記憶にとどめられ、人々は拍手しながら悲しみの気持ちを表わし、革命烈士を偲んだと書かれている。「呜呼，其志坚，其言壮，当时闻者无不扼腕流涕，鼓掌呼周浩然君万岁。盖君之急于国事，实已将身家性命抛之度外，彷彿有娶妻娶得德意志，嫁夫嫁得英吉利之概。故遇事勇往虽赴汤蹈火毫无顾虑，为济辈之所不能及也。噫，光汉会之得周君幸也*69」（まあ、確かにこの人は強い意思を持っていた。その豪快な発言を聞いた人は誰もが涙をこぼし、「鼓掌」して「周浩然君万歳！」と叫んだ。国が滅亡の危機に直面していたときに、自分の命を惜しまずに国のために奮闘していた周君は、他人の及ばない存在だ。光漢会（革命組織）は周君のような会員がいて幸運だ）とある。文脈から、悲しみの拍手であると解釈されるが、称賛の拍手とも解釈できる。しかし、もし称賛の拍手であるならば、涙を流すという行為とは違犯する。

1920年7月30日の『申報』には、「人当恋爱悲，拊手抚其心，其心亦龟裂*70」（人は恋愛において、悲哀を感じる時に、「拊手」して心を慰めることができる。しかし、心が裂けるように感じる時もある）とある。失恋したときの拍手の役割を述べている。中国では、失恋して泣いたり溜息をつくときに拍手の動作を伴うことがあり、それにより、やるせない気持ちを表現することがある。このときに、拍手は、悲しみに対する慰めの役割も果たしている。

同じ7月30日の『申報』には、「也因大哭不已闻者，咸为拊掌云*71」（この人の号泣が止まないのので、観衆たちも悲しくなって「拊掌」した）とある。

1924年の『紅雑誌』には、「其母见之大动而号，竟从猎师行十数里拊手顿足作种种悲戚之状*72」（母はこれを見て、大声で叫び、5キロほど追いかけた。そして、「拊手」しながら地団駄踏んだ。さまざまな悲しみの表情が見られた。）とある。足を踏み鳴らしているのので、悔しさを表現する手拍ちのようでもあるが、原文には悲しみの表情とある。

1926年8月14日の『申報』には、「正抚手微吟李义山氏‘他生未卜此生休’之句。生益恍然。不觉双行清泪*73」（記者は「撫手」して李義山の詩を読み、「他界なんてわからないけれども、この世はもうすぐ終わりだ」と軽く歌い、思わず涙をこぼした）とある。記者は、李義山の詩を手を拍ちながら読み進み、詩の中にある、この世を生きるということの悲哀の情感と一体化していく。

吳順榮『透過炊煙』（1999）における散文卷「灑向新世紀的花雨」にも、手を拍ちながら悲しい気持ちを表す描写がある。「如今，萦绕过我们的生活的炊烟，已惜然与我们告别，遥望村庄，我这个曾经被炊烟激动过温馨过幸福过，不禁为眼前这没有炊烟的村庄抚掌而歌*74」（現代生活は、稲藁や薪でご飯を炊いていた過去の農村生活にとって代わった。昔のなじみある生活の炊煙

は、次々に我々に別れを告げた。炊煙に感動し、幸せや暖かさを感じていた私は、眼前にある炊煙のない村に「撫掌」し、歌うのである」とある。拍手により炊煙のない現在を悲しむとともに、往事を懐かしんでいる。人々の生活場面では、悲しみと幸福感が混在することがあるが、拍手は両者をともに表現することができる。

2005年10月29日の『人民日報』に掲載された「**万古長空山長水闊（古代書院尋踪 11）：重慶西陽龍潭經院考察記**」には、「大雨在百年之后的庭院落下，我因此闻到了历史尘土中的地气。我像一个探寻者，又像一个怀旧者，“坐感岁时歌慷慨，起看天地色凄凉”。历史人物都已退场，面对作为住宅使用的庭院看云听雨，抵掌闲论，复杂的心理的确不是三言两语可以说清楚的*75」（百年の後、庭に大雨が降っている。



私は歴史の埃の匂いを嗅いだ。探求者のように、また昔を懐かしむ人のように、私は「歳月の経過を惜しみ、天地の色を見て淋しむ」のである。庭も世の移り変わりを経験した。歴史上の人物は、すでにおらず、今は住居に使われている庭を向いて、私は「抵掌」し考えに耽る。複雑な心境は一言で尽くせない」とある。この文章は、著者が、1896年に設立され100年以上の歴史を持つ龍潭学院を訪問したときのものである。著者は、「抵掌」しながら、過ぎ去った年月を懐かしむ哀情の気持ちを確かめている。こうした文章の検討するときには、登場人物の心境がどう作られているのかを知るため、歴史的な背景に加え、登場人物の人生経験なども考慮に入れる必要がある。

筆者の一人は、ネガティブな感情反応の拍手を検討する際の問題の核心にあるものは、拍たれている拍手が、その否定性を強めるようにはたらくのか、それとも、否定性を打ち消す方向にはたらくのかについての判断であると述べた。この問いに、性急に応えることは控えるが、本章で検討した悲しみの拍手の用例においては、そのネガティブな性質が軽減される効果があるということ是可以である。

10. 嘲り

ここから、嘲りとともに発する拍手を検討する。日々の生活において、礼儀正しく手を拍っているように見える場面でも、必ずしも称賛や敬意をもって手が拍たれているとは限らない。拍手して、嘲笑や皮肉を表現することもあれば、反語的に罵ることもある。嘲りとともに拍たれる拍手は、中国の古代にはそれほど多く見られないが、近現代においては、多くの例を見つけることができる。本稿で検討する嘲りの拍手の用例も、ここまでの拍手例よりずっと多い。

嘲りの拍手が描かれている絵画がある。この絵画は、明代の李士達が描いた《三駝圖》であり、猫背の老人三人の姿が描かれている(図1)。老人の拍手は嘲りの拍手図1 明代の李士達による《三駝圖》

であると考えられる。作者は老人3人が互いを嘲笑する場面を描くことで、社会を風刺している。

嘲りの拍手の特徴を検討しよう。嘲りの拍手は、ここまで検討した、怒

り、恨み、嘆き、悲しみなどの拍手と、どこが異なるのだろうか。まず、怒り、恨み、嘆き、悲しみなどは、拍手者自身の何らかの欠損した状況を示している。しかし、嘲りや皮肉などは、自分以外の人物への評価の表現であるため、手を拍つ本人に、欠損した状況があるのではない。拍手者自身は満たされている。すなわち、嘲りの拍手は、拍手者が充足した状況で拍たれるネガティブな感情反応であるということができる。次に、嘲りの拍手は、「笑い」と類似する特徴を持っている。笑いには、親和的な態度表明や嬉しさの表現など、ポジティブな感情反応としての笑いもあるが、冷笑、哄笑、皮肉や揶揄の笑いなど、ネガティブな態度や感情反応としての笑いもある。ここで、中国に特徴的な笑いである「偽笑い」に触れておかなければならない。中国では「笑いの中に刃物が隠される」という諺がある。これは、表面は笑顔だが心が陰険だという意味である。嘲りの拍手を分類する前に、こうした笑いの表現方法があることを認識しておかねばならない。笑い拍手の動作を組み合わせることにより、表面的な称賛と内心のネガティブな感情との振幅は、よりさまざまに表現される。さらに、単なる嘲笑と拍手による嘲笑との違いについても述べておこう。笑い拍手の違いは、笑いが不意に発生するのに対し、拍手は意図的に拍たれるという点である。この違いは、何らかの目的にむけて両者がなされるときに効果に違いをもたらす。例えば、嘲るという目的にむけて両者がなされるとき、不随意的に生じてしまう笑いよりも、意図的な拍手による方が、より効果的に達成される場合がある。

本稿では、嘲りの拍手を、一般的な嘲り、非難の嘲り、失敗への嘲り、優越・軽視の嘲り、反語・皮肉の嘲り、自嘲の6種に分類した。以下、順に見て行こう。

10.1. 一般的な嘲り

まず、一般的な嘲笑の拍手を検討する。東晋の袁宏（328-376）編纂による『後漢紀』には、「世俗之宾，方抵掌而击之，以为讥笑，岂不哀哉*76」（一般の客が「抵掌」して他人を嘲ることは何と悲しいことでしょうか）とある。嘲笑する動作として手が拍たれている。

三国時代から南北朝時代になると、拍手の記述が増えるが、南北朝時代の沈約（441-513）による『宋書』には、「推排梓宫，拊掌笑謔，殿省备闻*77」（彼は、皇后の棺桶を手で押すとともに、「拊掌」しながら、ふざけて嘲笑している。他の人々はそれを聞かないようにした）とある。文中の「笑謔」は、ふざける、もしくは嘲ることを意味するが、それが拍手する動作とともに表現されている。

『南史 謝超宗傳』（659）には、「坐上莫不抚手嗤笑，琨容色自若*78」（席の来客は、皆あざ笑いながら「撫手」しているが、琨だけが落ち着いている）とある。あざ笑う行為とともに拍たれる拍手であるため、嘲りの拍手であると考えられる。

宋代の『全宋詩』における劉克莊（1187-1269）の「一剪梅」には、「旁观拍手笑疏狂。疏又何妨。狂又何妨*79」（周囲の人々の拍手と嘲笑は、疎らでも熱狂的でもいいんだ）とある。周囲の人が拍手して傲慢な人をからかっている状況を観察した著者が、必ずしも拍手を抑える必要はないと、この拍手を評価して

いる。

明代の馮夢龍の『喻世明言』(1621)には、「一般也有轻薄少年及儿童之辈，见他挑柴又读书，三五成群，把他嘲笑戏侮，买臣全不为意。一日其妻出门汲水，见群儿随着买臣柴担拍手共笑，深以为耻*80」(軽薄な少年や子供たちは、朱買臣が薪を担ぎながら読書するのを見て集まって、彼をからかった。買臣はまったく気にしなかった。ある日、買臣の妻は、家を出て水を汲んでいたとき、子供たちが薪を担ぎながら読書する買臣を拍手して笑うのを見て、とても恥ずかしく思った)とある。作者の馮夢龍は、子供が拍手して朱買臣を嘲ることを描写することにより、主人公である朱買臣と妻との心理のすれ違いを描いている。

清代の菊畦子の『醒夢駢言』「呆秀才志誠求偶俏佳人」には、「那冷汗如抛散珠一般滚下来，众人却拍手大笑*81」(観衆たちは、彼の冷汗が止まらない様子を見て、拍手して彼を嘲笑した)とある。

近現代の例も挙げておこう。1920年4月27日の『申報』には、「有哂笑鼓掌之声不绝余，初不解其意，陡见妓女十余人亦方鼓掌欢笑*82」(騒々しい笑い「鼓掌」の音が後を絶たず、初め意味が分からなかった。なぜだろうかと思ったら、通行人が十人余りの娼妓とともに拍手してからかっているのが見えた)とある。通行人が拍手して娼妓を嘲っているが、娼妓も一緒になって拍手してそれを楽しんでいる。近現代にはこのような拍手例が数多くある。

10.2. 非難の嘲り

次に、非難や叱りの意味を込めて拍たれる嘲りの拍手の例をあげる。怒りの拍手とみなすこともできるが、単に非難するだけでなく、嘲笑っている拍手である。明代の羅貫中による『三国志通俗演義嘉靖壬午本』(1522)「甘寧百騎劫魏营 左慈擲杯戲曹操」には、「人人颈腔内各起一道青气，到上天聚成一处，化成一个左慈，向空招白鹤一只骑坐，拍手大笑曰：“土鼠随金虎，奸雄一旦休！”*83」(これらの人々の口腔から青い煙が上がり、空で左慈に形を変えた。左慈が空に手を振ると、一匹の丹頂鶴が飛んできた。左慈は丹頂鶴に乗って、拍手しながら笑い、「鼠年の後には寅年が来る、悪人はもうすぐ死ぬのだ」と曹操をからかった)とある。曹操に悪行に対する非難を含んだ嘲りの拍手である。

同じく同じく明代末の西周生(生没年不詳)による『醒世姻縁傳』(1640)「陳兄思妓泣亡師 魏氏出喪作新婦」には、「你既然守了家母，怎么敢哭？到家一发不敢哭了。不指了哭先生还待那里哭去？」众人也不管甚么先生灵前，拍手大笑，说完走散*84」(「君はお母さんの世話をしながら泣いていたのに、先生の家に来て、どうして泣かないのか？先生の霊の前で泣かなければ、泣くところは他にないぞ!」)と言い、師の霊前であるにもかかわらず、多くの人々が、拍手して彼を大笑いして、解散した)とある。拍手は非難の嘲笑として拍たれている。

清代の娥川主人の『生花夢』(1673)には、「康梦庚听了，不觉鼓掌大笑道：“原来一片蜃楼。向说贡小姐才貌两全，究竟是个村姑俗妇，只是炫人眼目*85」(康梦庚はこれを聞き、思わず「鼓掌」し、大笑いして言った。「幻想だったのか。貢家のお嬢さんは才能のある美人だと聞いていたが、ごまかして

いるのだな、奇麗なだけの田舎の娘だったとは」と言った）とある。この拍手は、欺かれたことに対する怒りの気持ちを含んだ嘲りの拍手である。さらに、この拍手は、はたと納得したときに手拍ちでもある。「気づき」の手拍ちは、日本においても、近世以後にしばしば拍たれている。

清代の『新增才子九雲記』（作者不明）「蘭陽主約詠美人詩」には、「桂娘拍手冷笑道：“酒令大如军令。好的、歹的，虽百次过了，各人有各人之当次。鸿娘那里不掷去，掷的上好罢。如掷的歹，宁可酒乏的无罚儿” *86」（桂娘は拍手して冷笑し「軍令より酒令の方が重要です。誰でも良いこと悪いことをしますが、それぞれ事情があるでしょう。鴻娘は、骰子で良い目を出せば、酒を飲まなくてもかまいませんが、悪い目が出たら、罰として酒を飲みなさい）」とある。冷笑の拍手であるが、叱責を含んだ嘲笑として拍たれている。

清代の『閱微草堂筆記』（1789-1798）に、「此人故狡黠，谎言偶与狐友忤，被提至此。主人故稔知之，拊掌揶揄曰：“此狐恶作剧，欲我痛扶君耳。姑免咎，逐出！” *87」（彼は狡い狐で、たまに主人と関係が悪くなる。今日、主人は、この狐を捕えて、「拊掌」しながら、嘲笑し、「この悪狐め。金輪際、お前との関係を断ち切る。鞭で打つことはしないから、すぐ出て行け！」と言った）とある。捕えられた男に対する嘲笑の拍手であり、怒りを含んでいる。

近現代には非難の嘲りの拍手例が増える。清末の郭廣瑞と董振順による話本『永慶升平前傳』（1891）「康熙俠義傳」には、「那道人在里面鼓掌大笑，说：“贼，你好无道理，真当我睡着了，你进来偷就是了。” 焕章进得屋内，说：“你老人家必是侠客，若要不然，如何知道我来？ *88」（その道人は部屋で「鼓掌」しながら大笑いし、「この泥棒、無礼だなあ、もしわしが寝たと思ったら、入って盗めばいいものを」とからかった。焕章は部屋に入り、「あんた義侠なのか、じゃなければ、なぜ私が来た気づいたんだ？」と聞いた）とある。夜更かしに慣れた道士が、部屋に入った泥棒を見つけ、思わず拍手し、この不運な泥棒を叱りつけながら嘲笑っている。

1912年11月の『時事新報圖畫』には、「旁观派鼓掌大笑曰：“你们的伎俩都见了，尚在那里张拳弄棒的什么 *89」（野次馬は拍手して大笑いし、「あなたたちの計略はすべてわかったよ。何やってるんだ！」と言った）とある。拍手は非難であり嘲笑である。

1920年1月10日の『申報』には、「路旁的行人不去责怪这顽童，反而拍手大笑笑这女郎胆怯 *90」（道端の通行人は、その悪戯ものを諫めるところか、逆に女性被害者の臆病さを拍手して大笑いし非難した）とある。

1922年8月20日の『星期』には、「两个西洋人穿着雨衣站在江边的大山岩上拍手大叫，笑我们海军不中用呢，还是可怜我们一船的生命 *91」（二人の西洋人は、レインコートを着て、川の近くの大きな岩山の上に立ち、拍手し大声で、中国人の海軍は低能だよ、船乗りがかわいそうだ！と叫んだ。）とある。拍手は嘲笑として拍たれているが、嘆きでもあり非難でもある。

1938年10月12日の『申報』には、「过了一会儿，俘虏天野治郎，就在鼓掌声中出现台前 *92」（しばらくして、観衆たちが「鼓掌」すると、捕虜の天野治郎は、台の前に立った）とある。「鼓掌」が嘲笑し非難する拍手の意味で用いられている。

日記から例をあげる。『徐永昌日記』1949年3月8日に、「当孙哲生步上报告位时，一小部份立委鼓掌，继以较多嘘声，孙从容道其昨晚提出辞意已获准，台下大鼓掌，继作施政报告近一小时，旋休息十分钟*93」（孫哲生が報告台に登壇するとすぐに、一部の官僚たちが「鼓掌」し、「しゅー」と声を発し続け、嘲った。しかし、孫が昨日の辞表が許可されたと述べて余裕を見せると、長い「鼓掌」が送られた。そして1時間ほど施政報告して10分休憩した）とある。前半の「鼓掌」は、非難の嘲りを表現する拍手であるが、後半の「鼓掌」は、承認し肯定的に反応する拍手、もしくは両者が混在する拍手であると解釈できる。非難の嘲りと承認という逆方向の意思表示を、同じ「鼓掌」の語で表現している。

評論作品にも例がある。唐弢による『唐弢雜文選』（1955）には、「不管会造成文艺界如何不良的影响，不管如何被他人旁拍掌称快，却非得大干不可”，这确是糟透的人物，非请他滚蛋不可*94」（その活動が、文芸界にそんなに悪影響をもたらし、そんなに他人が「拍掌」し高笑いするのだとしたら、たとえ当人のやりたいことがあっても、酷い人物なので、出て行ってもらうしかない）とある。拍掌は嘲笑であるとともに、この人物への批判である。この例文を日本人が読めば、拍掌は称賛として拍たれていることになるが、中国人は、この文の「拍掌称快」を、拍手喝采されているようでも、皮肉もしくは反語として表現されており、風刺された野次であると読むのである。

1999年4月2日の『人民日報』に掲載された「山崖之樹」には、「朋友在一旁拊掌而笑，问我今日为何这般模样？一会儿颠狂，一会儿痴迷*95」（友達は私に「拊掌」し笑い、「どうしてこんな姿になったのか、気が狂ったのか、痴れ者になったのか」と私をからかった）とある。

10.3. 失敗への嘲り

失敗に対して拍たれる嘲りの拍手の例をあげる。

晋の陳壽による『三国志・魏志・董二袁劉傳』（280-290）には、「绍军士皆拊膺泣曰：“向令田丰在此，必不至于败。”绍谓逢纪曰：“冀州诸人闻吾军败，皆当念吾，惟田别驾前谏止吾，与众不同，吾亦惭之。”纪曰：“丰闻将军之退，拊手大笑，喜其言之中也。”绍于是谓僚属曰：“吾不用田丰言，果为所笑。”遂杀之*96」（敗残した兵士らは、「袁紹なので負けてしまったが、田豊がいれば、ここまでには至らなかった。」と泣きながら言った。袁紹は逢紀に、「冀州の人々は、私が負けたことを聞いて、私のことを恨むだろう。田豊は、戦いの前に、他の將軍と意見を異にし、この戦争は我が軍の負けだろうと言っていた。私は悔しい」と言った。逢紀は袁紹に、「田豊は將軍の敗戦を聞き、「拊手」して大笑いし、予言の的中を悦んでいました」と言った。袁紹はそれを聞き、田豊を殺した）とある。田豊は官渡の戦いの直前に投獄された謀士である。逢紀は、田豊が堀の中で拍手し大笑いしていると言って、田豊を陥れた。拍手が袁紹への称賛ではなく嘲笑であったので、田豊は命を落とすことになった。拍手の意味の解釈が、生死を分けた例である。

干寶(282-351)による『搜神記』には、「府君拊掌大笑曰：‘昔语君，死生异路，不可相近。故也’*97」（府君は「拊掌」しながら大笑いして言った。「だ

から以前に申したではないか。生者と死者とでは世界が違うもの、近づいてはならぬと」とある。説得を聞かずに、結果として痛い目に遭うのを見て、府君(神)が嘲笑の意味で打った拍手である。

梁代の蕭子顯(489-537)による『南齊書 謝超宗傳』には、「司徒褚淵送湘州刺史王僧虔，閣道坏，墜水；仆射王儉尝牛惊，跌下车。超宗抚掌笑戏曰：“落水三公，墮车仆射” *98」(司徒褚淵が、湘州刺史である王僧虔を送る途中、架け橋が壊れたため、王僧虔は水に落ちた。僕射である王儉の牛が驚いて王儉を落とした。超宗は「撫掌」して笑い「水に落ちたのは三公の王僧虔で、牛から落ちたのは僕射の王儉だ」と言った)とある。王儉と褚淵は裏切り者である。彼らの窮状を見かけた謝超宗は、拍手で裏切り者への軽蔑や嘲笑の意を表した。

清代の蔡東藩による『唐史演義』(1924以前)には、「国子祭酒祝钦明，自请为八风舞，摇头转目，胁肩谄笑，装出许多丑态，引得韦氏以下，无不鼓掌。吏部侍郎卢藏用，私语同座道：“祝公以儒学著名，今乃如此出丑，五经已扫地尽了*99」(国子祭酒である祝欽明は、自作の八風舞の披露を求めた。それは、頭を揺らし、目をくるくる回し、卑屈に諂い笑い、醜態を晒す振りなので、観衆たちは「鼓掌」してからかった。吏部侍郎を務める盧藏用は、同席の人に「祝さんは有名な儒学者なのに、今日はこのような失態を起こして、恥をかいたな」と呟いた)とある。歴史上の人物が手を拍たれ嘲笑されている場面が、生き活きと描写されている。

同じく清代の王韜による『淞隱漫錄』(1885)には、麗娥が一人の道士を嘲笑する記述が滑稽に描かれている。「道士踉跄遁走，见者无不鼓掌大笑，谓：“处置若辈，宜以此法。孰令其丰干饶舌哉！” *100」(道士は慌てて逃げた。見かけた人は、「鼓掌」して大笑いし、「役立たずは逃げるしかない。余計なこと言って罰に当たったな」と言った)とある。道士は威張って法術を真似ようとするが、法術を信じない麗娥に出会った。麗娥が御虎子を道士の頭かけると、その滑稽な光景を見た人々は皆拍手して笑ったのである。

1902年11月28日の『大公報』には、「那外国人听说他左腿麻木不仁的时候，就拍手顿脚的笑*101」(彼が左足が痺れていても芝居を続けるということを知り、その外国人は拍手したり床を蹴ったりして笑った)とある。路上にいた身体の不自由な少年を、外国人が拍手して嘲笑している。

『繡像小説三十六卷』(1906)には、「站起来说道：“先生尽管说下去，为什么顿了？这有什么要紧？佛家说的，无我相，无人相，像先生这般，就是有我相、人相了。”众人拍手大笑，弄得徐筱山下不来台*102」(学生が立ち上がって、「先生は演説を続けてください。なぜ、急にやめるんですか、気にしなくてもかまいません。仏教なら、没我でしょうが、先生は有我です。」と言うと、皆は拍手してからかったので、徐筱山はとても恥ずかしくなった)とある。演説を中断してしまった徐筱山に対する嘲りの拍手である。

清末以後も、失敗に対して拍たれる嘲りの拍手は多い。林鯉による『中國歷代珍稀小説』「傾談」には、二成と犬の勝負を見て、隣の子供が拍手して嘲笑っている様子が、「二成快低头抱，恰与狗相争。狗开牙咬他，几乎咬断手指，咬得血淋淋、红滴滴。拾回几件烧肉，又染泥沙。旁有一班儿童拍掌呵呵大笑。二成喃喃咒骂，忿忿而归*103」(二成は走っていると、犬に噛まれ、指が

切れるほど、血まみれになり、地面も赤くなった。泥がついた犬の食べ物を拾っていた隣の子供たちは、彼の様子を見て、「拍掌」して大声で笑った。彼は子供たちを叱りながら、不機嫌に帰った」と記されている。

1918年8月1日の『小説季報』には、「官军大骇，踉跄自山后遁至于滚跌而下，匪拍手大笑*104」（軍隊が怖がって山から転げ落ちていく光景を見た強盗は、拍手して大声で笑った）とある。

網蜘蛛による『人海潮』（1919）には、主人公が口論で負け、赤の他人に嘲笑われる光景が描かれている。「孔才兄再耐也耐不住，只好假出恭，溜之乎也。从此立下一个愿誓，今生今世，不再收寄女儿，不再叫堂唱。」一番话说得孔才两脸通红。众人拍手哗笑*105」（孔才は、耐えられずに手洗いに行くふりをして逃げた。それから、彼は、娘を養女にして歌わせて稼ぐのを今後一切やめると、顔を赤くして誓った。周囲の人たちは「拍掌」して彼を嘲笑した）とある。

1921年6月3日の『申報』には、「见他国运动员跳高未过、赛跑落后等而拍掌者*106」（他国の選手が高跳びや競走で劣後し、拍手でからかわれるのを見る）とある。

平江不肖生(1889-1957)による『近代俠義英雄傳』には、「黒力士趁势挣脱了手，就是一拳，朝着白力士脸上横打过去。白力士避让不及，被打得栽倒在丈以外。众人见黑人打到白人，一齐拍手嘲笑，白人愤怒*107」（黒人レスラーが、振り切って逃れながら、拳を振り上げると、白人レスラーの顔面に当たった。白人レスラーはゆっくりと避けようとしたが、打撃が命中し、場外に倒れた。中国の観客は、黒人が白人を打ち負かしたのを見て、一斉に拍手し嘲笑った。それが白人を怒らせた）とある。白人が黒人の敗者となるのが恥辱であった時代の文章である。

魏金枝による『時代的回声』（1957）には、「悻悻然的抱怨和不屑，只是气坏了自己，别人也许正在拊掌大笑，笑那令箭上的鸡毛，如今成为垃圾桶里的废料呢？*108」（私は不満に思い、自分に怒りを覚える。周囲の人々は私に「拊掌」し大笑いし、「鶏の羽はゴミ箱のなかの屑になった」と私に伝えた）とある。「鶏の羽」は、重要な文書に添える飾りのことであり、かつての私は重要人物であったが今は屑になったとして、拍手で嘲笑されている。

1961年の鄧拓による「燕山夜話」には、党と社会主義に反対するスピーチを記述した箇所があり、「适在座，谓人曰：此带汗诸葛亮也。传者莫不拊掌。倪知而怒，将罪之*109」（その場にいた一人が、「倪氏はまさにべそをかいた諸葛孔明のようだ」と言った。それを聞いた人たちは皆、「拊掌」した。倪氏はそれを知ってひどく怒り、罪なことだと言った）とある。南宋時代に戦争で負けた味方の倪將軍を人々が拍手で嘲った場面の引用であり、革命に反対する人々が風刺されている。

10.4. 優越・軽視の嘲り

嘲笑の拍手には、他者を蔑み見下すことにより、自らの優越の達成を悦ぶ拍手がある。優越の確保は、拍手者の立ち位置を肯定するため、ポジティブな感情の拍手と解釈すべき用例もある。1世紀に馬鳴が編纂した仏典『大莊嚴經論』に、「时诸婆罗门，抚掌大笑言：‘是故汝癡人 定堕于负处’*110」（波羅門たち

は「撫掌」しながら大笑いし、あなた達のような人は必ず失敗すると言った)とある。波羅門が世俗の人々を軽視する拍手である。

後漢(25-220)の書とされる伶玄の『趙飛燕外傳』には、「樊嬙侍后浴語甚欢,后为樊嬙道夷言,嬙抵掌笑曰*111」(樊嬙が皇后の入浴の世話をしていると、話がはずみ、皇后は、樊嬙に蛮人が言ったことを聞かせた。すると樊嬙は「抵掌」して笑いながら話し始めた)とある。「抵掌」で嬉しさを表現しているが、蛮人への嘲りも含んでいる。

干寶(282-351)による『搜神記』の中に、「见光在松树上,拊手指挥,嗤笑之。緜问侍从,皆无见者*112」(光っているものが、松の木の上で「拊手」しながらこちらを指さし、あざ笑っているのが、緜さんには見えたのである。そこで供の者にたずねたが、誰も見た者はなかった)とある。拍手者は人間ではないが、「拊手」してあざ笑っていると記されている。

『周書』に収録された「庾信傳」(636)の序文には、「陆士衡闻而抚掌,是所甘心;张平子见而陋之,固其宜矣*113」(私はこの賦(文体の一種)を書いたのであるが、陸士衡と張平子がそれに「撫掌」した。陸士衡がそうするのは望ましいことであり、張平子がこの文を軽視するのは当然のことである)とある。陸士衡は西晋の高名な文学者であるが、「陆士衡闻而抚掌」は、この賦が自信作であるため、陸士衡に嘲笑されても価値を損じることはないという意味である。作者は、陸士衡に拍手されても文句を言わず、張平子に見下されても当然のこととして受けとめるのである。

明代の羅貫中による『三國志通俗演義嘉靖壬午本』(1522)には、「操曰：“刘璋虽系宗室,乃守户之犬耳,何足为英雄!”玄德曰：“如张绣、张鲁、韩遂等辈皆何如?”操鼓掌大笑曰：“此等碌碌小人,何足挂齿!”*114」(曹操が「劉璋は、宗室であり番犬なので、英雄ではない。」と言うと、劉備は、「では、張繡、張魯、韓遂たちはどうか?」と聞く。曹操は「鼓掌」し大笑いし、「張繡、張魯、韓遂などは大志がない小人であり、とるにたりない。」と言った)とある。曹操と劉備が天下の英雄を語る場面であり、曹操による優越の手拍ちが記されている。

明代の馮夢龍による『春秋列国志傳』(1574以後)には、「武曰：“臣之兵法,不但可施于卒伍,虽深闺妇女,使奉吾令,亦可调用。”吴王鼓掌大笑曰：“先生之言何迂也!焉有妇女可使其操戈习战乎?”孙武曰：“王如以臣言为迂,请得女嫔与臣试之!令如不行,臣甘受罪。”吴王即诏出王僚宫女一百八十人,令孙武操演*115」(孫武の「臣の兵法は一般兵士はもとより、後宮の婦女を操ることもできる」という発言を聞いた呉王は、「それは信じられない。婦女は戦争で戦えない」と「鼓掌」して笑った。孫武は「臣の言う通りに女官を賜り、もしそのようにできなかつたら、臣は罰を受けてもよい」と言う、呉王はすぐ180人の女官を孫武に与えた)とある。呉王は孫武が女兵を訓練できると信じていなかったのも、手を拍って孫武を嘲笑ったのである。

近現代の例をみよう。1903年4月17日の『大河新聞』に掲載された「虚己待犬」の中で、記者は、犬を人に例え、「这位作者是不是因世象之奇而作如是之语,我不便妄测,但可以想象此语必有接受者,重狗轻人者固不以为忤,卑狗重人大约也会觉得言之尽态,只不过为之拊掌一笑者惟有后者,前者恐怕笑不起来,这是很可惋惜的*116」(彼がはたして捻れ現象の例としてこんなこ

とを書いたのかを、推測することはできないが、その考えに賛成する人が必ずいると想像できる。つまり、犬を大切にしておいて人を軽んじる者は不孝であるとは思われず、犬より人が大切だと言っても何の意味もないこと気づくのである。「拊掌」して嘲笑されるのは後者の方であり、前者は笑えないだろう。残念なことだ（と思う）と書いている。拍手で嘲笑、皮肉を表現していることは明らかである。但し、この文は、人を犬より軽んずる少数派の人々が、常識的な多数の人々に対する優越を確保しており、そうした人々を拍手で嘲笑しているのである。

1911年10月9日の『申報』には、「拍手冷笑，称为万国所无之奇形怪态者西人也*117」（彼は拍手して「我が国にない奇怪なものは西洋人だ」と冷笑した）とある。皮肉を込めた優越の拍手である。

1919年1月10日の『小説季報』には、「子奇起身，未出馆门即拍手大笑曰：「世界上固有此等夜郎自大之人」*118」（子奇は、立ち上がり、まだ門を出ないうちに、「世の中にはこんな身のほどを知らぬやつがいるとは知らなかった」と拍手して大笑いした）とある。

1920年11月24日の『申報』には、「现于他国之舞台必博得拊掌哄笑也*119」（他国における交流施設では、必ず観客は「拊掌」し哄笑するのである）とある。哄笑には軽視の皮肉が込められている。

1932年1月11日の『申報』には、「当兵车经过榆关时、日军在站台上鼓掌讪笑、一般民众均闭门不敢出视*120」（中国の軍隊は、駅のプラットフォームの日本軍を「鼓掌」し嘲笑した。民衆は家にとどまり、その様子をあえて見ようとしない）とある。

1999年11月9日の『大河報告』には、「话说大贪污犯、原海南东方市市委书记戚火贵，荣升省监狱管理局副局长宝座，走马上任前，志得意满，妙语如珠，当众戏言道：“各位今后有事只好到监狱找我了！”言讫，与僚属们推杯换盏，抚掌大笑，状极开心。谁知，戚先生虽登龙有术却也有限，并未笑到最后，局长位子还未暖热，甫过半年便东窗事发，露出了硕鼠的原形，去了他曾管理过的众多监狱中的一个*121」（横領罪を犯した元海南省東方市の市委書記の戚火貴氏は刑務所管理局副局長に昇任したとき、自信満々で弁舌爽やかに「皆さんはこれからご用件があれば、刑務所までお越してください」と冗談を言いながら、同僚らと「撫掌」して笑い、酒宴を楽しんでいた。しかし、戚火貴は最後まで笑えなかった。昇任してわずか半年後、横領が発覚し、罪を問われ、逮捕され、以前管理職を務めた刑務所に移管された）とある。戚火貴の拍手は、同僚を逮捕してやるという脅しを込めた優越の拍手であるが、他方、冗談を言い楽しみを分かちあっている拍手でもある。

2008年2月1日の『人民日報』「門神和錢貼逸話」には、「尉迟公不得已，令书生执笔写上“钱付某某某五百贯、某月某日”。书生拜谢而去。尉迟公与其徒弟拊掌大笑，以为书生是疯子。书生得到钱贴，来到钱库中，再次见到金甲人，呈上钱贴，金甲人笑曰：“是也”。便将钱贴系于库梁高处，给书生取钱五百贯*122」（尉遲敬徳は仕方なく、書生に「尉遲敬徳は某氏に五百貫を払う。某月某日」と書かせた。書生はお礼を言って帰った。尉遲敬徳とその弟子は「拊掌」し大笑いし、書生は頭がおかしいのではないかと思った。書生はお金を調達するため金蔵の中に入り、再び金庫番に会って手紙を置くと、

金庫番は笑いながら「はい」と応えて手紙をかざし、書生に五百貫を与えた」とある。この文は、唐代の軍人で後に関門神（金銭の神）として崇められた尉遲敬徳と秦叔宝の逸話である。拍手は、神である尉遲敬徳の支払書を作成した書生への嘲笑を表現している。

2017年4月12日の『人民日報』に掲載された「聴古今」には、「伯修复说鬼神奇怪事，并缘饰添加以相恐吓。姊与予皆胆薄，灯火明灭，风吹纸窗，真如有物至，大骇啼而走。伯修拊掌大笑为乐，如此以为常*123」（伯修は、また妖怪や鬼神の怖い話を語り始めた。話に尾鰭がついて余計に怖くなった。姉と私は怖がり屋だから、灯りが突然明滅し、風が障子を吹き抜けると、幽霊が来たかと思ってビビりながら逃げた。伯修は「拊掌」して大笑いした。よくあることだ。）とある。怖がり屋の作者たちを嘲笑する拍手である。

10.5. 反語・皮肉の嘲り

他者の失敗をあげつらい、自らの優越を確保しようとする嘲笑の拍手において、拍手対象者に対する拍手者の立ち位置や態度は明確である。他方、それらが必ずしも明確ではない嘲りの拍手もある。皮肉や反語のかたちで嘲るときにも、手が拍たれることが少なくない。これらの拍手は、拍手対象者を肯定しつつ否定するので、感情反応の向けられる方向に捻れを生じさせる。

明代の羅貫中による『三國志通俗演義嘉靖壬午本』（1522）「馬謖拒諫失街亭 武侯弹琴退仲達」には、「言訖，拍手大笑，曰：“吾若为司马懿，必不便退也。”遂下令，教西城百姓，随军入汉中；司马懿必将复来*124」（馬謖は言い終えると、「私がもし司馬懿だったら、絶対に撤兵しない」と司馬懿に拍手しながら大笑いした。そして、西城の人々に、司馬懿は必ず戻ってくるので、軍隊とともに漢中まで移動するようにと命令を下した）とある。馬謖は司馬懿をたたえながら嘲笑しているのである。

反語・皮肉の嘲りの拍手の例は近現代に多い。スポーツ競技やイベントの場面で、皮肉の野次を飛ばすために拍手することがある。1921年6月3日の『申報』には、「见他国运动员跳高未过、赛跑落后等而拍掌者，当经会场职员宣布，拍手系表示庆贺，此种举动实含有讥笑之意*125」（他国の選手の高跳を審判員が失格にしたり、競走で脱落の判定を言い渡すのを見た観客が「拍掌」する行為は、友好の標に見えて、実は蔑みの嘲笑でもある）とある。スポーツ選手に向けられる拍手は、殆どの場合が称賛の拍手であるが、他国の選手の失敗に対して拍手をするときには、皮肉な蔑みの拍手行為となる。

1961年の『新體育』に掲載された「從觀眾“鼓掌”談起:迅速地提高籃球裁判水準」には、「如果再进一步分析，我们人物观众‘鼓掌’是鼓的好。虽然来了个‘倒好’，面子上不大好看；并且也有碍会场秩序，但是他们鼓的常常是裁判员的缺点所在*126」（もっと分析すると、我々観客の「鼓掌」は、好ましいことであるが、野次を飛ばすことだとすれば、好ましいとばかりは言えない。会場の秩序を乱しながら、いつも審判員の欠点をあげつらっている）とある。観客が、拍手しながら野次を飛ばすという皮肉により、審判の不公平な採点を糾弾することについて書かれた文である。観衆の「鼓掌」は、野次を飛ばすほどの嘲りの拍手という意味であり、手拍ちに加え掛け声が多分に含ま

れるときの表現である。

1973年に出版された『語文知識』には、反語の例として毛沢東が記述した次の文が挙げられており、拍手の記述もある。「这个条件一经我们的可爱的蒋总统提了出来，几千万的工人、手工工人和自由职业者，几万万の农民，几百万的知识分子和公教人员，惟有一齐拍掌，五体投地，口称万岁*127」（この条件が、かわいい蒋介石総統の口から発せられた瞬間、何千万人の職工、職人と自由業者、何億人の農民、何百万人の知識人と公務員、教育者は、一齐に「拍掌」し、跪くようにして、万歳と叫ぶしかなかった）とある。文中に「かわいい」「跪くように」などの誉め言葉が使われているが、軽蔑の意味が込められており、拍手も皮肉の意味をもっている。

反語や皮肉の拍手の用例は詩文に多い。1974年に刊行された詩集『旗渠之歌』には、「听着，安东尼奥尼：/你是‘谁家的工具’，自有证见。/杜勒斯的幽灵向你颁发奖金，/墨索里尼的阴魂夸你有‘新贡献’。/你寻到了新主子——/新沙皇封你为‘世界著名导演’！/莫斯科为你大开宣传机器，/台湾的群丑也为你鼓掌呐喊！*128」（アントニオニよ、聞け、あなたは一体だれのものなのか、証明してやる。ダレス（John Foster Dulles）の幽霊はあなたに賞金を与え、ムッソリーニの霊はあなたの新しい貢献を称えた。あなたは新しい主人を見つけ、ロシア皇帝からも「世界的に有名な監督」の称号をもらった。モスクワはあなたを大いに喧伝し、台湾の馬鹿どももあなたのために「鼓掌」して声をあげていた）とある。イタリアの映画監督ミケランジェロ・アントニオニは、1972年、中国政府の招待を受けて中国を訪問し、ドキュメンタリー映画「中国」を制作したが、中国政府から反中反共と非難された。この詩はアントニオニに対する批判の声明である。台湾の民衆が「鼓掌」して声をあげていたとあるが、この拍手には皮肉が含まれており、台湾の民衆による称賛を嘲る意味が込められている。

1980年に出版された『台湾詩選』における「先住黒人的美國不是人間的話」には、「向范錫鼓掌/向孟代爾鼓掌/更向卡特鼓掌/因为他们口口声声人权/他们还指指点点/说这里没有人权/说那里没有人权/脸上是正义凛然/台下只好拚命鼓掌*129」（マンスフィールドに「鼓掌」する/マンデラに「鼓掌」する/さらにカーターに「鼓掌」する/彼らは人権を口にするから/彼らは問題点を指摘するから/ここに人権がないと言い/そこに人権がないと言い/口だけで正義と言うから/政治の舞台上で懸命に「鼓掌」する）とある。民衆たちは、そこに人権がないと言って正義を振りかざす政治家に拍手し嘲った。4件の「鼓掌」のうち、4番目の拍手は、「正義」という雰囲気でのまれて仕方なく発した拍手行為であるが、その他の拍手は、嘲笑の意味をこめた皮肉の拍手である。

2003年5月14日の『人民日報』に掲載された「“趙千萬”現象的幾點反思」には、「闻名三湘的‘赵千万’即赵更效裁了，裁得让人拍手称快。笔者在拊掌称庆之时，又不免生出一丝感叹：‘赵千万’给国家造成了严重损失，极大地损害了党的形象，也断送了自己的前程。‘赵千万’现象值得社会和我们每一个人反思*130」（湖南省で趙千万と呼ばれていた政治家の趙更効が逮捕されたことは、誰もが拍手するほど爽快なことだ。しかし、筆者が「拊掌」し慶を称える時には、また少々の失望を覚えざるを得ない。趙千万は国益を大いに損ない、党の顔に泥を塗り、自らの前途をも台無しにしてしまった。趙千万事件は、社

会と私達一人一人に反省を促す)とある。この文章は、湖南省婁底副市長の趙更効が汚職収賄罪で逮捕され、全国を騒がせたときの記事であり、文中2カ所で手が拍たれている。一つは、逮捕されて拍手し快哉を叫ぶほどの嬉しい拍手、もう一つは、「拊掌称庆」すなわち、慶賀する手拍ちである。後者は原文に「感歎」とあることから、溜息をついて嘆く意味もあり、皮肉を込めた拍手として描かれている。

以上の用例から、拍手が反語的な意味を表現しうることがわかる。拍手は、直接的な感情反応を表現するのに適する行為であると考えられているが、反語や皮肉として嘲笑する拍手が存在するのである。

10.6. 自嘲

皮肉や揶揄に含まれるネガティブな態度が、他者ではなく拍手者自身に向けられれば「自嘲」となる。用例は少ないが、自分を嘲笑う自嘲の拍手と解釈できる例がある。明代の『醒世恒言』(1574以後)の「杜子春三入長安」には、「子春唱罢，拍手大笑，向众亲眷说声请了，洋洋而去，心里想道：“我当初没银子时节，去访那亲眷们，莫说请酒，就是一杯茶也没有。今日见我有银子，便都设酒出门外送我*131」(杜子春は、拍手して大笑いし、親戚に「どうぞ」と言って、立ち去った。「昔貧乏だった時には、親戚を訪れると、酒はおろか、お茶も出してくれなかったのに、今日こうして金持ちになってみれば、どいつもこいつもお酒を出して見送りにくる」と心底で思っていた)とある。杜子春は、手を拍つことにより、見送りにきた親戚を嘲笑するのみならず、金持ちになって戻ってきた自分自身を嘲笑するのである。

11. 終わりに

本稿では、中国に特徴的なネガティブな感情反応としての拍手の例を、古代から現代までの文献に探り、怒り、恨み、残酷さ、無力感、怖れ、嘆き、悲しみ、嘲りの順に、用例を示した。これらの拍手が、実際にどう拍たれていたのかを確認することはできないが、本稿では、古代から現代まで、時代背景が明確である場面の例を、数多くとりあげることができた。

本稿では、ネガティブな感情反応と一括りに論じたが、人の感情は決して単一の感情で完結するようなものではなく、複合的に形成されるものである。本稿のデータを拍手研究に活かすには、感情表現の組合せと拍手との対応を検討していく必要がある。なお、ネガティブな感情反応としての拍手は、日本では、平安時代の頃まではみられるが、現代の日本では見ることができない。今日の日本人が、中国の文献を読むときには、本稿で論じた中国人の拍手の習慣を知らなければ、拍手の意味を取り違えることがあるだろう。本稿は、拍手研究のみならず、中国文献の読解、感情表現の比較研究などにも役立てることができると考える。